資料４－１

聴覚に障がい（疑い含む。）のある子どもの言語能力の発達の支援～とりわけ乳幼児期における子どもとその保護者の「手話の獲得」を支援する環境づくりについて～早期支援・療育・教育の現場を中心に～

河﨑佳子（神戸大学）

<資料>
「手話とろう者　～家族・教育～」より抜粋
手話・言語・コミュニケーション　No.2
日本手話研究所偏　文理閣（２０１５．４．１０）

手話から遠ざけられて成長した人々の体験

健聴者モデルの大きさ

誤った自己認識

アイデンティティ形成上の課題（自尊感情・時間的展望）

親子関係の問題

庇護と依存　⇔　強制と服従　→ 思春期以降の家庭内暴力

養育における「ことば」の剥奪（奪われた生活言語）

孤独と空想

学校でも、茶の間でも･･･　→ 心的防衛として空想・読書

行動化の大きさ（暴力　自傷行為　遁走）と 拒絶的対人関係

手話がもたらす発達の質的変化
～手話の威力～

◎映像思考が保障される。
◎他者とのやり取りにおける
　同時性　相互性　対等性　効率性　が保障される。
◎映像記憶の想起が活性化される。
↓
◆論理的思考の可能性を広げる。
◆感情体験を可能にする。

単なる「情報のやり取り」を超えた
「真のコミュニケーション」を可能にする。

手話が心理発達（人格形成）にもたらすもの

◎愛着形成と手話

「かかわり合う能力」の発達　＝　対人関係の基盤

愛着対象を知り、その内在化を可能にするためのやりとり　＝　信頼

◎自尊感情と手話

「全部わかる自分」を実感

「相手にわからせる（伝える）ことのできる自分」を実感

「ありのままの自分」を是とする体験

◎アイデンティティ形成と手話

自分と同じことばをもって生きる存在（仲間・先輩）との幅広く、深く、豊かな出会い

早期支援の重要性　対人関係の鋳型づくりのとき

「ものごころつく」と呼ばれる以前にも、幼児はさまざまな感情を味わいながら、世の中の事象や人々を結びつけて考えている。

深層心理学的に言えば、想起できない時代だからこそ、後の人生に重大な影響を与えるのだとも言える。

つまり、対人関係の「鋳型」を築く時期。

この時期に親子（家族）が手話に出会って、ろう児にとってより自然なやりとりを楽しめるかどうかが、早期支援の決め手となる。

後に人口内耳を装用する子どもについても、まずは手話との出会いを保障し、コミュニケーションの楽しさを知り、人とかかわることへの積極性、「わかること＝概念形成」への意欲をもった3歳さん！を育てたい。